SHIMIN PHOTO

市民フォト

KAGOSHIMA

鹿児島

NO.94

平成15年10月1日発行

屋外のオブジェ

Outdoor Objet

【石灯籠（いづろ）】
～いづろ交差点～

CONTENTS

【特集】時を越えて、つながり続ける人と建物……3
クローズアップ……12
前田浩二さん
学校探訪……14
南中学校
カメラトピックス……16
ハロー鹿児島……18
マリアリン・アシロ・デ・サン・アンゴスティンさん
私の好きな場所……20
有馬良一さん
ふるさと再発見～美術編～……22
黒田清輝
あなたのフォトサロン……24
ラ・サール高等学校写真部
よかタイム……26
達山洋美さん
街角ウォッチング……27
甲突川河畔
わが家の味じまん……28
鬼塚さんファミリー
館のたからもの……29
鹿児島市民文化ホール
わが町上空 支所編……30
伊敷支所周辺

★表紙写真説明

現在カフェとして使われている石蔵。積み重ねた八十五年の歳月を穏やかな秋の光が照らし出します。

～潮音館（清水町）～

江戸時代に建てられた旧島津邸での結婚披露宴。武家屋敷ならではの和の雰囲気が人気【重富荘（清水町）】

特集 時を越えて、つながり続ける人と建物

市内にある古い建造物。長い時を経て、今も現役でそれぞれの役割を果たしています

日常生活の支え

水のあるくらしを支える

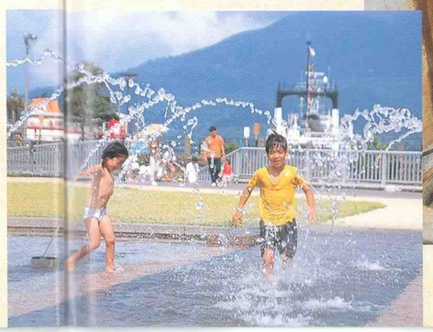
七窪水源地

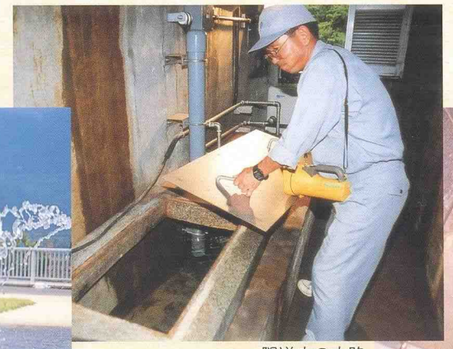
市水道局七窪水源地・上之原配水池～築84年（下田町・西坂元町）

下田町七窪。うっそうとした木々の緑の中に鹿児島市の近代水道の出発点がある。

大正8年（1919年）、七窪の湧き水を集め、自然勾配を使って上之原配水池に送る延長約3・3キロメートルの隧道（トンネル）が完成した。水源の集水枡やそれを集める接合枡を覆う建物は石造り、隧道はコンクリート構造。配水池からは水道管で上町方面へ送水。現在もその経路は変わらない。

その後、水道施設は市内全域に広がり、大正8年に3パーセントであった上水道普及率は、平成15年現在約95パーセント。市民の暮らしの根本を支えている。



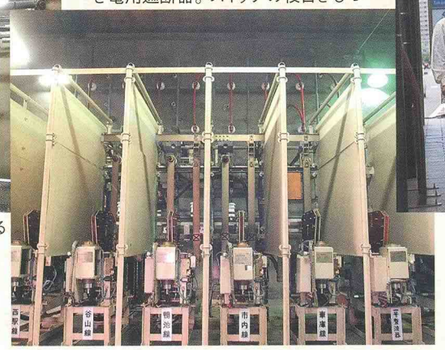


隧道内の水路

水源からの水を集める接合枡

「市民の足」の心臓部

直流600ボルトが各電線に送電される



き電用遮断器。スイッチの役目をもつ

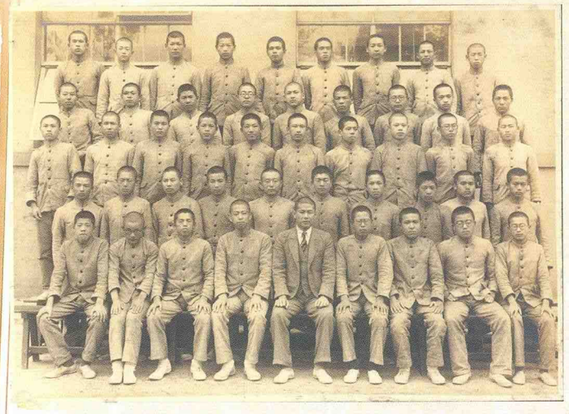
市交通局武之橋変電所～築91年（高麗町）

市交通局構内にある武之橋変電所。石造りの建物は、武之橋―谷山間で路面電車の運行が開始された大正元年（1912年）当時のものだ。

建物の内部は、市電の心臓部。6000ボルトの交流電圧を直流の600ボルトに変換し、各電線にプラス電流として流す。電流はパンタグラフから車両に伝わり、マイナス電流となってレールを通り、再び変電所に戻ってくる。

機器類は老朽化するたびに、新しいものに替えられ、別棟で遠隔制御されているが、建物はその堅固さで「市民の足」の中枢を守り続けている。

思い出と誇りのシンボル



昭和11年、4年2組の学級写真。最前列右から4番目が中村さん

二中の校舎で学んだころ

中村一雄さん（大正9年生まれ）

私が通っていたころはまだ新しい建物で、物理の教室が階段式になっているなど当時としては珍しい、立派な校舎でした。

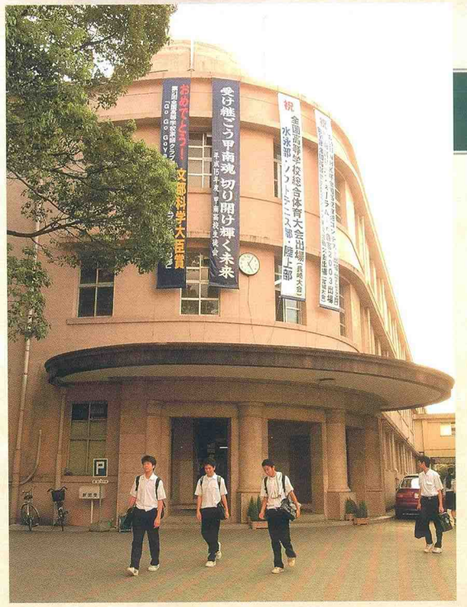
「修身」という授業の時間に、歴史にとても詳しかった池田俊彦校長先生が西郷さんの話をしてくださったことをよく覚えています。

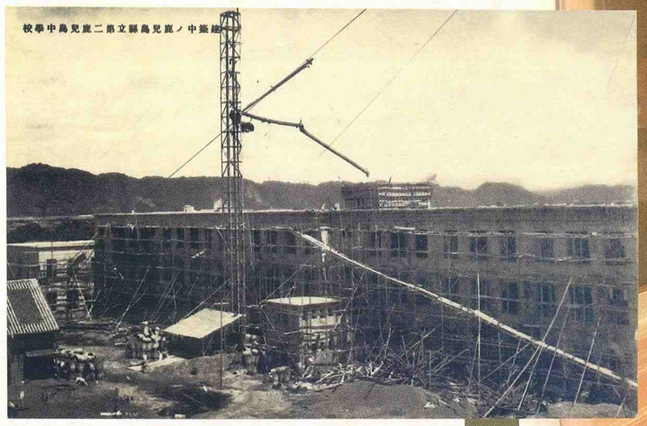
写真を撮った昭和11年は、二・二六事件があった年。その後、太平洋戦争へと続いていく過酷な時代の緊張感のなかで皆、一生懸命勉強していました。

旧制中学は5年制でしたから、この校舎で過ごした時間も長いです。その分愛着もありますね。今も年に2回、同窓会の会合で母校を訪れます。校舎の雰囲気はほとんど変わっていません。廊下で生徒たちと会うと大きな声であいさつをしてくれます。今でも礼儀を大切にしているのだとうれしくなりますね。

県立甲南高等学校校舎 ～ 築73年（上之園町）

昭和5年（1930年）に鹿児島県立第二鹿児島中学校（通称、二中）の校舎として建てられた。戦争中の大空襲でも戦火をまぬがれ、終戦直後一時アメリカ軍の兵舎となったが、昭和24年の男女共学の甲南高等学校発足など、時代の流れを見つめ続けてきた校舎である。





建築中の二中校舎（昭和3～5年ごろ）

幅広い世代の思い出の場所

この校舎について、甲南高校の元校長で自身も二中出身である増永昭一郎さんに聞いた。

「校長時代、建物の強度検査をしたのですが、とても丈夫にできている。設計もさまざまな工夫が凝らしてあって、昔の人の技術の緻密さを感じましたね。

ただ、古い建物なので維持は大変です。生徒たちのためには、新しい設備を整えた校舎に改築したほうがいいと思います。

でも、この校舎から最初に卒業した人が現在90歳。今学んでいる高校一年生が16歳。実に70年余りにわたって幅広い世代の人たちが思い出を作ってきた場所です。全国でも数少ない例ではないでしょうか。卒業生のこの校舎への思い入れも強く感じています」

近代鹿児島の歴史を伝える

尚古集成館（集成館機械工場）。現在は資料館として使われている

尚古集成館～築140年
日本の近代工業をリードした鹿児島

吉野町磯。尚古集成館は、今から約150年前、薩摩藩が取り組んだ近代化事業・集成館事業を現代に伝える建物である。

事業の研究を進める尚古集成館・文化財課長の松尾千歳さんに聞いた。

「日本の近代化に西郷隆盛・大久保利通が大きく貢献したことはよく知られていますが、当時の鹿児島が日本の工業の先進地であったことはあまり知られていません。

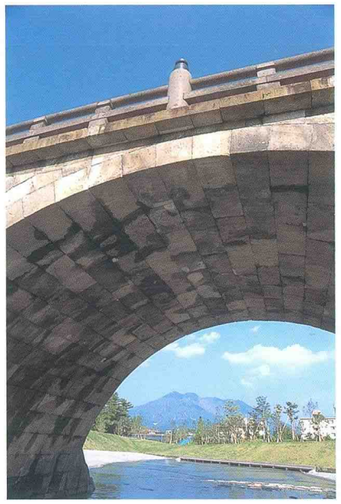
鎖国をしていた江戸時代も、薩摩藩は南からの海の玄関口でした。外国からの情報も入りやすく、また、文献などでヨーロッパの技術を理解し、石橋に代表されるような独自の技術で応用する力をもっていました。

集成館事業は磯に築かれた工場群『集成館』を中核に製鉄・造船・造砲・紡績・機械・印刷・出版・ガラス・ガスなどさまざまな分野にわたって推進され、その技術は日本各地に伝えられていきました。

西南戦争でその機能が東京に移されるまで鹿児島は日本で最先端の技術をもつ工業地域だったんです。

このことを鹿児島の人はもっとよく知り、誇っていいと思います。情報が氾濫（はんらん）し、アイデンティティを見失いやすい時代だからこそしっかりと根を張るために、子どもたちにも鹿児島がどんな場所だったのか知ってほしいですね」

石橋が今見つめているもの

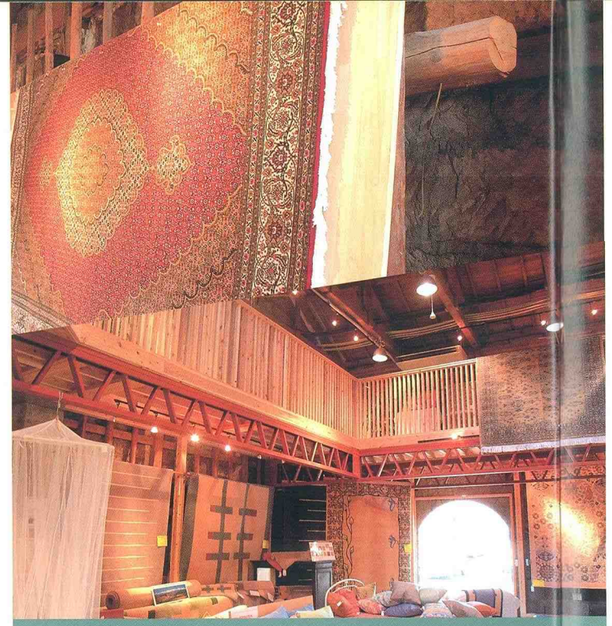


甲突川に架かっていた3つの石橋（西田橋、高麗橋、玉江橋）が、10年前の8・6水害での流出や河川工事のため移設された祇園之洲公園。休みの日には多くの家族連れでにぎわう。

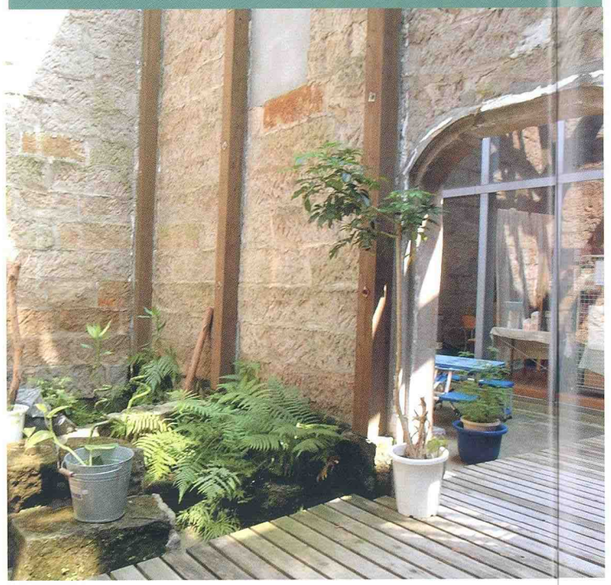
今、桜島を眼前に望むこの場所で、名工たちの技を伝え、水と戯れる子どもたちを見守るという新たな役割を担いながら、第二の人生を送っている。

レストラン
～磯くわはら館～築99年（吉野町）
串木野にあった島津家芹ケ野金山事務所を移築。レストランウェディングなどにも使われている

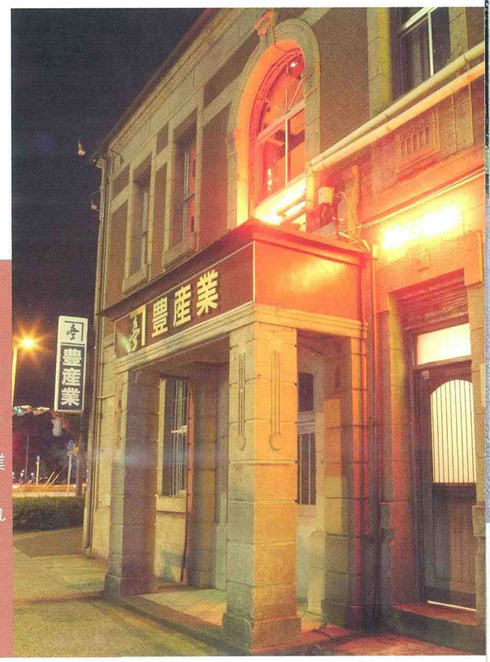
楽しみの場所となる



店舗 ～ふとんの今藤～ 築85年（住吉町）
明治の終わりから大正時代にかけて造られた石蔵倉庫の一つ。内部も石造りを生かした構造。「1度このお店に来てみたかった」というお客さんも多い



バー
～B.B.13 BAR～（泉町）
大正時代に建てられた豊産業社屋の2階をバーとして営業。落ち着いたなかにもおしゃれな雰囲気が漂う



「なぜ活躍し続けられるのか」

すでに70年～140年の時を経た建物がさらに時を重ねようとしている。それができるのはなぜなのか。

まず、設計時に長年の使用に耐えられるような配慮が万全になされたということである。基礎がしっかりとしていなければ、建物が生き続けることはできない。

しかし、素材自体の老朽化は避けられない。それを補うのが、建物を維持するための努力である。古い建物であるほど、同じ素材が入手しにくいなど、メンテナンスは難しい。だが、そこに関わる人たちの思いが建物を維持させてきたのではなかろうか。

第二次世界大戦の空襲で鹿児島の街は一面焼け野原になった。それでも残った建物に人々はわずかながらも希望を見出したかもしれない。

だが、街の復興が進み、時が流れるにつれ、古い建物は街の中に埋もれて目立たない存在となった。注意も向けられないまま、取り壊されていったものもある。

しかし、建物がもつ役割は文字通り「建物」としてだけのものではない。独特の雰囲気をかもし出したり、人々の精神的な柱にも、街のシンボルにもなり得るものである。

私たちは、普段何気なく使い、通り過ぎる建物のもつ可能性を、もう一度見つめ直してもいいのではないだろうか。

市長に聞く

古い建物は街の個性の象徴

半世紀を過ごした市庁舎への思い

私は昭和24年2月に市役所に入り、以来54年をこの庁舎とともに過ごしてきました。いわばこの建物は私の人生そのものですね。

庁舎は昭和12年に建てられました。斬新なデザインと堂々とした威容、そして建物の頑健さに接すると、当時の鹿児島市の隆々たる勢いと設計者の先見性を感じます。それに今はいぶし銀の魅力が加わり、「本当に良いものは時代を越えて光る」ということを実感しますね。

戦争で焼け野原になった鹿児島の街の中に無傷で残り、昭和、平成と鹿児島市の発展の歴史を見守ってきた建物でもあります。

まさに鹿児島市のシンボルですね。

古い建物は鹿児島の街の歴史そのもの

古い建物は鹿児島の豊かな歴史そのものであり、観光面でも大きな資産です。鹿児島市が目標とする潤いと個性に満ちたまちづくりに不可欠な存在ですから、大切に保存したいですね。

また古くて長い生命に、時代が求める新しい息吹を与えて、これを活用することも考えていかなければならないと思います。

鹿児島市役所市庁舎

Close Up
クローズアップ

前田　浩二さん

略　歴

昭和44年、鹿児島市生まれ。鹿児島実業高校、鹿屋体育大学を卒業後、ジュビロ磐田や横浜フリューゲルスなど9つのJリーグチームでプレーし、チームリーダーとして活躍を重ねる。
今年3月にクラブチーム「ヴォルカ鹿児島」の監督に就任。監督兼選手としてピッチに立つ。

子どもに夢を与える前田監督兼選手。
試合後、気軽にサインや握手に応じる。

「地域に密着したプロのサッカーチームを鹿児島につくりたい」と故郷に戻ってきた前田氏。チーム合併のため消滅した横浜フリューゲルスの選手会長のときに「企業の一方的な都合によるチームの消滅」に異を唱え、その男気のある姿から「男・前田」と評された。
「2010年Jリーグ入りを目指す」と明確に語るその精悍（せいかん）な顔つきは意志の強さを感じさせる。

優れた選手の受け皿になりたい

高校までは全国トップレベルの鹿児島県のサッカー。しかし、卒業すると優れたプレーヤーは県外へ出て行ってしまう。「ヴォルカ鹿児島を子どもたちのあこがれのチームにし、優秀な選手が鹿児島でプレーしたいと思えるようなチームをつくりたい」。
サッカーを通じて全国各地を渡り歩いた前田氏。鹿児島県人の性質を「管理されていることに慣れていて、おとなしい」と感じている。「でも、裏を返せば、実直なところがあるということ。明治維新のころから鹿児島はいろんな分野で優秀な人材を世界に輩出してきた。今度はサッカーで薩摩から世界に飛び出せるようにしたい」と抱負を語る。続けて「このチームは九州で、いや日本でトップに立てる潜在的な力を既に持っている」ときっぱりと言い切った。

地域が一番のサポーター

チームの選手のほとんどが仕事を持っている。そのため、練習は主に平日の夜と土曜日。しかも専用の球技場がなく、土のグラウンドでの練習がほとんどだ。「行政にもハード面の整備をお願いしたい。サッカーは地域経済を活性化し、まちづくりの起爆剤にもなる」と広い視野でのサッカー効果を論じる。
また、企業に財政的な支援も求めている。「一つの企業から支援を受ける野球と違い、サッカーは幅広くスポンサーを募ることができる。おいたっ

チームの土台を固め 2010年に Jリーグ入りを目指す

が（俺たちの）まちのおいたっが（俺たちの）チームを育てるために、ぜひ協力いただきたい」。
しかし、何よりも大切なのは地域の人たちのサポート。「鹿児島ならではの応援で盛り上がるのもいいんじゃないかな。例えば、おはら節をアレンジした指笛なんか楽しそう」と笑った。

黒といえばヴォルカ鹿児島

競技人口は世界一といわれるサッカー。その魅力を「ボール1個で始められる身近さ」と語る。「鹿児島でも子どもからお年寄りまで身近にサッカーを楽しめる環境をつくりたい。ヴォルカ鹿児島がその環境づくりをリードし、鹿児島のスポーツ界全体を引っ張っていきたい」。
地域に密着したチームづくりを進めるために、今年からチームカラーを黒にした。鹿児島には黒豚、黒酢、黒麹（くろこうじ）焼酎など、黒をイメージする特産物などが多い。「でも将来は、黒といったらヴォルカ鹿児島と言われるようになりたい」と真剣な表情で語った。

学校探訪

南中学校

今日から新学期、久しぶりに会う友達と笑顔を交わす

実力テスト。これさえなければ学校って楽しいのに

自分たちの学校は自分たちの手できれいにするぞ

静思

生徒会長の打つ和太鼓の響きとともに静かに目をとじる。今まで気付かなかった自分自身と出会うひとときを

創立 昭和34年4月1日　生徒数 448人　（平成15年9月1日現在）

体育大会に向けて猛練習

カメラトピックス

Camera Topics

7月16日
交通遺児に対する見舞品贈呈式
交通事故で親を亡くした小・中学生を励まそうと、図書券が贈られました。

7月8日　市政モニター委嘱式
市民の意見や提言を市政に反映させるための市政モニター制度。100人にモニターを委嘱しました。

7月21日
シロクマへ氷のプレゼント

7月10日　磯海水浴場海開き

都市農業センター
ひまわり10万本

8月6日
かごしま温泉健康プラザ入場者50万人達成
平成11年4月開館。多くの市民が腰やひざに負担がかかりにくい水中運動で、健康づくりに励んでいます。

8月6日
商店街おかみさんカレッジ
おかみさんたちがマーケティングや接客術を学びながら、意見を交換。ラッピングの仕方なども学びました。

8月17日
交通局 市電・市バス
ゆ～ゆ～フェスタ
市電・市バスに親しんでもらうイベント。手型ペインティングバスはたくさんの子どもたちの手形と名前でいっぱいになりました。

8月20日
青少年の翼帰国報告会
オーストラリア・パース市とアメリカ・マイアミ市に派遣された高校生と中学生がホームステイを通じた交流などを報告しました。

9月7日
市立少年合唱隊
創立30周年記念定期演奏会
85人の隊員が、30周年記念曲・合唱組曲「一直線に」などを披露し、澄んだ歌声で観客に感動を与えました。

故郷のみんなの健康を守る 大きな使命を背負っている

【フィリピン出身】

マリアリン・アシロ・デ・サン・アンゴスティンさん

（愛称 リンさん）

Hello KAGOSHIMA

12年前の火山灰に襲（おそ）われる故郷

20世紀最大といわれた1991年のフィリピン、ピナツボ火山の大噴火。リンさんの故郷ボトーラン町はそこから西へわずか40キロのところ。

5月から10月までの雨期には今も火山灰を含んだラハール（土石流）に襲われることがある。大雨のたびにラハールが大量の土砂を運ぶ。川の流れの高さはどんどん高くなり、首都マニラに通じる橋とほぼ同じ高さになってしまった。「橋が流されると地域の経済が成り立たない。住むところも失うことになるんです」と深刻な表情になるリンさん。現在進んでいる政府の対策プロジェクトに期待している。

山の中腹までアンゴスティン家の田んぼ。子どものころから農作業を手伝い、米作りに詳しい

スタッフと同じレベルを目指す

多くのフィリピン人が一度は日本に行きたいと思っている。だから日本語と日本の技術を勉強することが盛んだ。「日本に行くための競争率は非常に高い。すごくラッキーでした」。リンさんは母子保健に関する研修生としてこの5月に市の保健所にやって来た。来るまで鹿児島のことは何一つ知らなかった。

日本語の勉強は来鹿してからスタート。最初は難しかったがどんどん面白くなった。今は帰宅後、好きな音楽を聴きながら日本語の勉強をするのが日課になった。「保健所の仕事は大変ですが、毎日が勉強で時間を無駄にできません。研修が終わるころには、日本語でこのスタッフと同じレベルの仕事ができるようになりたいです」と目標を設定している。

日本人は恵まれているけど・・・

「生活に余裕があるから、しつけがきちんとなされ、一人ひとりの仕事への責任感も強いのでは」というのが日本人への印象。がむしゃらにやらなくてもある程度のものが手に入る暮らしにうらやましさはある。しかし日本人に欠けていると思うこともある。「こっちの人がフィリピンで暮らしたら大変だろうなと思います。フィリピンでは何もない中で工夫して生きていかなければなりません。毎日がチャレンジなんです」。

みんなの記憶に残りたい

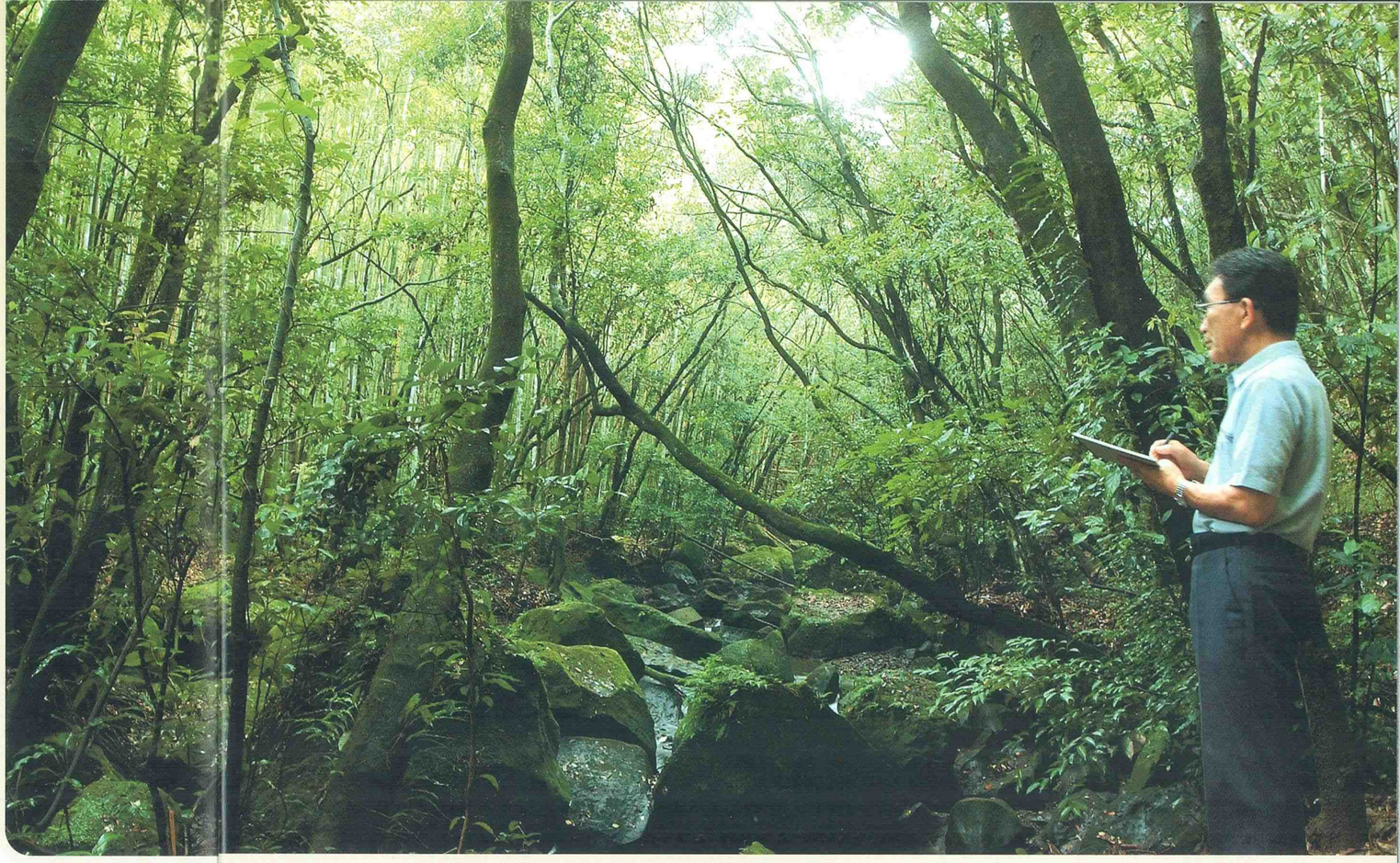
休日は、国際交流のイベントに参加したり、仲良くなった友だちと釣りをしたりと忙しいが楽しく過ごす。週一回、仕事の後に太鼓も習う。

「いろんなことに参加して、できるだけたくさん友だちをつくりたい」というリンさんには何としてもやっておきたいことがある。「友だちの記憶に自分をしっかり残しておきたい。少なくとも私の友だちには英語とフィリピン料理をマスターさせたいですね」といたずらっぽく笑った。

リンさんが好きな言葉

- Better an empty pocket than a head without talent and knowledge
  才能や知識がない頭より空のポケットのほうが役に立つ
- He who sows,shall reap
  何かを植える人は何かを収穫する

市街地の近くで野鳥に会える、慈眼寺公園で自然を堪能します



私の好きな場所

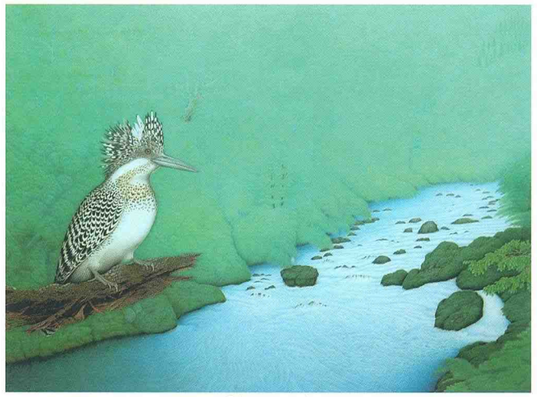
My favorite Place

有馬　良一さん

昭和8年生まれ。
昭和43年から点描画を描き始め、同47年から声帯模写で県内の社会福祉施設や老人クラブを慰問。日本野鳥の会会員。日本鳥類保護連盟会員。本市登録「元気高齢者」。

慈眼寺公園

それは、昭和43年のことでした。勤めていた会社の窓辺に、黄色いかわいい一羽の小鳥が飛んできたんです。7月の暑い日のことでした。いつまでも飛んでいかないものですから、私が捕ってくると同僚に言って、瓦をそうっと伝って、ほんの近くまで行ったんですが、逃げてしまいました。その時突然、加世田の山の中で育った子どものころの記憶がよみがえりました。山で小鳥を追いかけたり、川にダンマエビを採りにいったり、虫の声を聞いたり。



「ヤマセミ」

いつしか、黄色い小鳥を描く情動にかられた自分がそこにいたんです。たまたま机の中にあった12色の色鉛筆を使って、黄色い小鳥を思い出しながら描いたのが、野鳥を描くきっかけです。いろいろ試行錯誤しまして、色鉛筆を針のように研がして、虫眼鏡を通して点で描いてみたんです。すると、びっくり。塗って描いたものとは天と地ほどの差があったんです。まったくの自己流ですが、点の重ね塗りで濃淡を出して描くのが、私のやり方になりました。

慈眼寺公園にはよく来るんですよ。いつでしたか、和田川に枯れた木が垂れていましてね。そこにアカショウビンが止まっていました。うん、そうだ。あのときアカショウビンを見たのはここだった。

ここには、サンコウチョウもいます。カジカも鳴くんですよ。自然が残っているんですね。慈眼寺公園はいいですよ。ここに子どもたちも来て、自然に親しんでもらいたいですね。自然に触れたくなったら私もすぐここに来ます。市内ではここが一番いいですからねえ。鹿児島の街からすぐでしょう。こういう緑豊かなせせらぎが聞こえる場所がある。ああ、本当にすばらしい。

これまで、昼休みも会社で、家でも夜遅くまで、休みの日は朝から晩まで、描き通しでした。街に出ることもなかったです。退職してからはもうずっとです。書きためた作品で野鳥原画展をあちこちで開いています。ええ、おかげさまで大変な反響をいただいています。野鳥の、自然の大切さが少しでも伝えられたらいいですね。

「絵」は私の人生そのものかもしれないですね。毎日、ただコツコツやってきただけなんですよね。70を超えただけで、体力的に衰えたと感じますよ。でも、できるだけ歳を取ったと思わないようにしています。これからも、一つひとつ描いていきますよ。

［取材メモ］

野鳥が、緑が、水の流れが、本当にそこにあるように浮き出て見える。感嘆して見入ってしまった。

一つの作品を仕上げるには500～2000時間かかる。針のように細く3㎝ほどの長さに芯を研がして、点描していく。根気のいる作業である。

野鳥の鳴き声もお聞かせいただいたが、本物が鳴いているようで、とても声帯模写とは思えなかった。

野鳥を愛して止まない有馬さんの思いは、これからも着実に広がっていくことだろう。

黒田清輝 自画像 1889年 市立美術館蔵

法律から絵画へ転向

ふるさと再発見 ～美術編～

黒田清輝

文 市立美術館 山西 健夫

鹿児島出身の代表的な画家といえば、まず黒田清輝（一八六六～一九二四）の名前を挙げることができよう。名作「湖畔」であまねくその名を知られている黒田は、日本近代洋画の父とも称されている。しかし、黒田が十八歳にしてフランスに留学した時、その目的が絵画修業ではなく法律を学ぶためであったということはあまり知られていないようだ。

黒田は慶応二年、鹿児島市高見馬場に生まれた。父親は薩摩藩士の黒田清兼で、新太郎と名づけられる。この名は伯父清綱の幼名と同じであったため、すでに出生時に定められていたらしいのだが、明治四年、五歳のときに清綱の養子となった。翌年には上京して平河町の清綱邸に住むようになるので、郷里の鹿児島で過ごしたのは幼年期の短い期間だった。

六歳以降を東京で過ごしたとはいえ、黒田は早くから薩摩の士族教育に必須の『虎狩』（朝鮮出征時の島津義弘が、秀吉の命を受けて虎狩を行った物語）を読んでいる。また、養家の人は皆鹿児島弁で話しており、黒田は薩摩の武家の気風が色濃く残るなかで育っていった。

養父の清綱は幕末の動乱期に奔走（ほんそう）し、維新後は東京府大参事、文部小輔、元老院議官に任じられた。後に華族に列して子爵を授けられ、枢密官顧問となる。すなわち、黒田家は薩摩の名門という家柄であり、黒田もいつかは養父の跡を継ぐことを期待されていた。明治十七年、フランスに留学したのは法律学を学んで、将来政治家となるための素養を積むためであった。

ところが渡仏して二年目頃から、もともと好きであった絵画への志向が高まり、ついに画家となる決意を固めるのである。当時養父に宛てた書簡には、「今般天性ノ好ム処ニ基キ断然画学修業ト決心仕候」と記されている。

法律から絵画への転向は、大きな不安要素をはらんでいた。そのまま法律を学んでいれば将来は保障されている。しかし、画家として成功するとは限らないし、当時はまだ画家の社会的地位すら危ういものであった。さらに、厳格な養父を説得することも頭の痛い問題であったに違いない。

「自画像」は、油彩画を始めて間もない滞欧期の制作になる。将来への不安と絵を描くことの喜びが渾然として胸中に去来していた黒田二十二歳、青春の姿である。

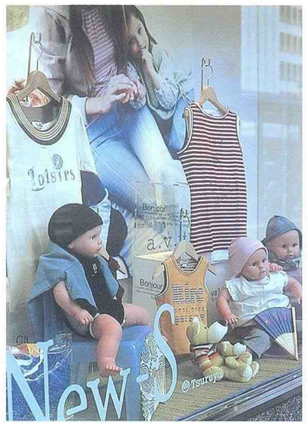
黒田清輝
養父の像　1898年
市立美術館蔵

「ぼくの心に映るもの」

ラ・サール高等学校写真部

「静」　濵園 裕樹（高2）

「淀川（よどがわ）～in屋久島」　神原 亮介（高2）



「憧憬」　濵園 裕樹（高2）

「疾駆」　安守 俊裕（高2）

「沈黙」　木月 康雄（高1）

「午後の光」　安守 俊裕（高2）

草木染め

達山 洋美さん

模様を斜めにしてひと工夫したテーブルクロス。一緒に染めている仲間たちからも「すてき」と歓声があがりました。

すてきな色ですね

ヤマモモで染めて、色落ちしないように焼ミョウバンの液に浸しました。草木染めは、植物や貝、虫など天然の染料を使って染めます。

身近にあるもので染められそうですね

タマネギの皮や自宅に植えているミントなどでもきれいに染まります。散歩しながら紅葉したサクラの落ち葉を拾い集めて染めたこともあります。木や花を見ると、どんな色が出てくるのかなとつい思うんですよ。

どんな模様を入れますか

ツバキの花びらの部分、花芯の部分と、別々に染めてグラデーションにしたり、北海道に旅行したときに見たハマナスをイメージした絞りを入れたりしています。模様を入れるときは、どんな仕上がりになるかどきどきしますね。

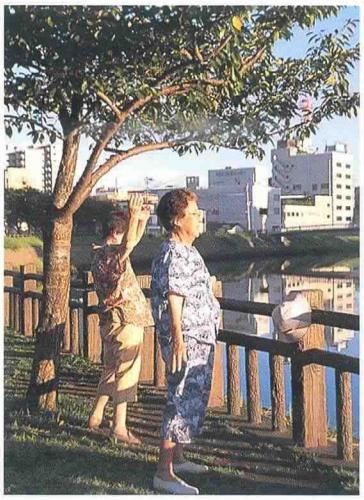
楽しみかたは

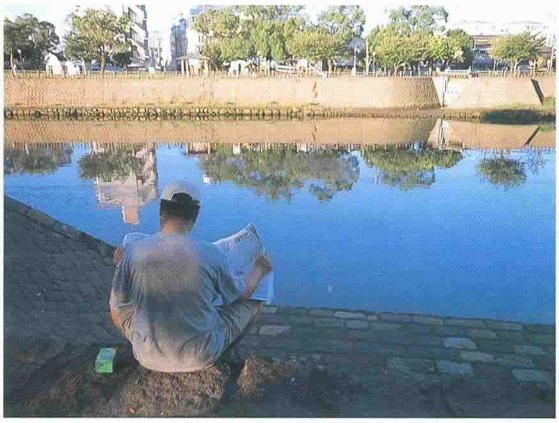
今はスカーフや敷物を中心に作っています。自然から出た色なので、作品を眺めていると気持ちが落ち着きます。草木染めを始めたのも色にひかれてだったんですよ。これからは糸を染めて、タペストリーを作ってみたいと思っています。

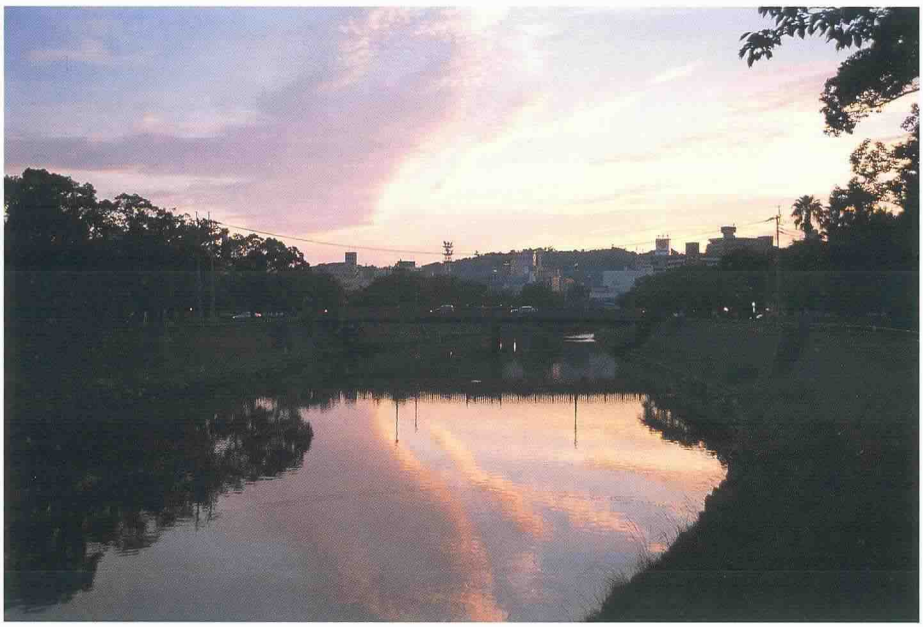
ひとつひとつに思い出のある作品

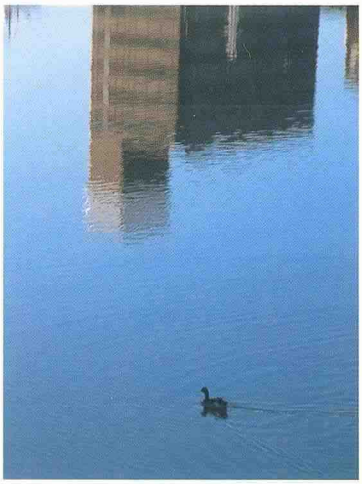
街角ウォッチング

～甲突川河畔～









わが家の味じまん

「冬瓜の煮物」

「炊き込みごはん」

鬼塚さんファミリー

［五ヶ別府町］

家庭の数だけ食卓があり、家庭の数だけ語らいがある。テーブルに広げられた自慢の料理は、家族の笑顔を演出する。

鹿児島市内におよそ23万5千世帯。一人から大家族まで食卓の風景はさまざま。わが家の味は家庭をどのように彩っているのだろうか。

ふつふつと煮立っている鍋。夕食の時間だ。みかんの観光農園を経営している鬼塚昌年さん、美知子さんご夫婦と娘の聖子さん、息子の啓介さんの4人家族に、隣に住んでいる昌年さんのお母さんの成子さんの5人で囲炉裏を囲んだ。

聖子さんと啓介さんが小さいときは「危ないから掘りごたつにしていた」という囲炉裏。今は復活して、「これからの季節は、煮物やとんこつなどで出番が多くなります」と昌年さん。

おいしそうに湯気をたてている冬瓜の煮物をいただいた。口の中でとろんと溶ける。

「この炊き込みごはんはかまどで薪をくべて炊くんですよ」。生姜の香りがふんわり広がる。お米一粒一粒がふっくらして、味もほどよく染み込んでいる。かまどで炊いたごはんは格別だ。お客さんに炊き込みごはんを出すときは、竹の皮に包んで出すそうだ。「ごはんに竹の香りが移っていい香りがしますよ」。

「子どもたちも仕事をしているので、家族全員がそろうのは夕食のときぐらい。いろんな話をするようにしているんです」と昌年さん。今日も話が弾みながら、和やかに食事が進んだ。

今回のレシピ

「冬瓜の煮物」

1. 材料（5人分）

豚の三枚身200g、冬瓜220g、ジャガイモ300g、ニンジン150g、ゴボウ100g、コンニャク200g、タケノコ200g、長ネギ100g、ショウガ少々、みそ200g、砂糖100g、酒少々

2. 調理手順

①冬瓜、ジャガイモ、ニンジン、ゴボウ、コンニャク、タケノコを大きめに切る。
②長ネギを斜め切り、ショウガをみじん切りにする。
③鍋に油を入れて豚肉を炒め、水1500ccと①を加えて中火で20分くらい煮込む。
④みそ、砂糖、酒で味付けし、弱火で40分くらい煮込んだら、②を入れて、軽く沸騰したら火を止める。

「炊き込みごはん」

1. 材料（5人分）

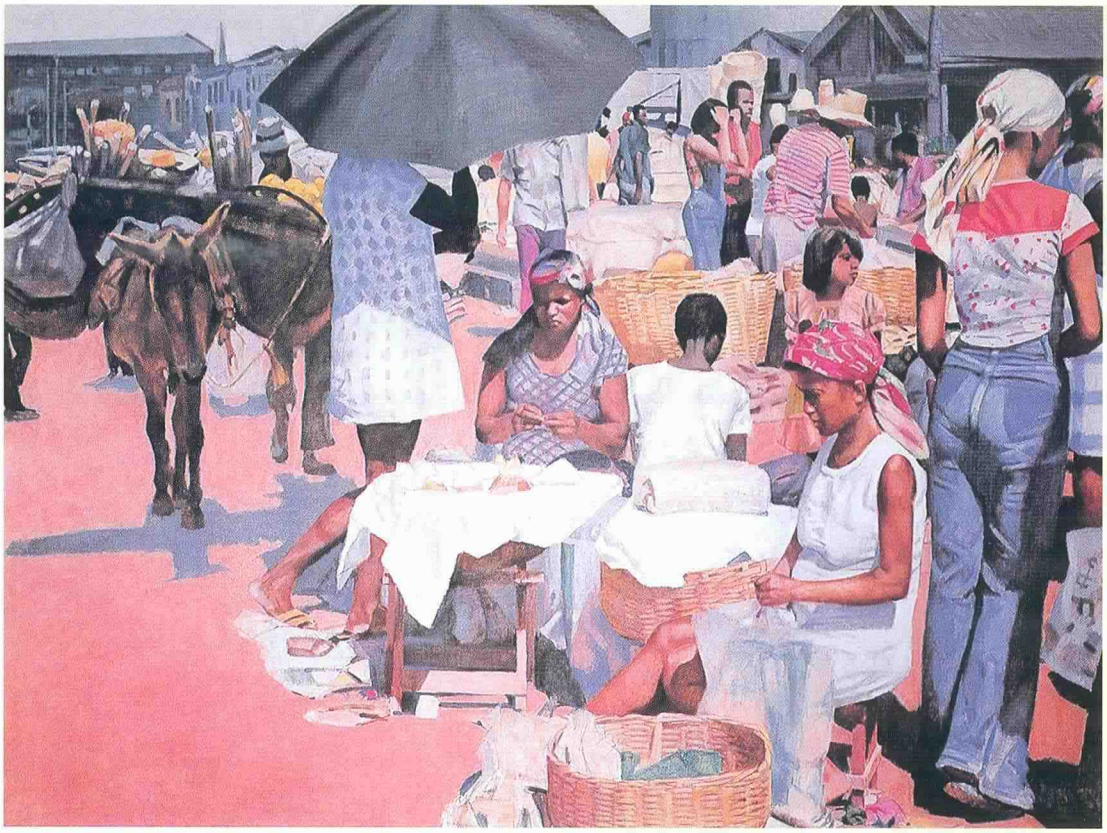
米6カップ、地鶏300g、干しシイタケ200g、ショウガ少々、薄口しょうゆ120cc、濃口しょうゆ50cc、酒、塩少々

2. 調理手順

①米は洗って、20分水につけ、ざるに上げておく。
②干しシイタケを水で戻しておく。
③地鶏と②を小さく切り、ショウガをみじん切りにする。
④鍋に油を入れ、切った地鶏、シイタケと半量のショウガを炒め、水を入れて10分くらい煮込む。
⑤④を薄口しょうゆ、濃口しょうゆ、酒、塩、残り半量のショウガで味付けし、沸騰したら①を入れ、しばらく沸騰したら火を止めて蒸らす。

鹿児島市民文化ホール
「フェイラ」

（1983年）
吉井　淳二



正面玄関を入ると、目の前に桜島を望むことのできる広々とした空間のエントランスホールがあります。その西側の壁に飾られた大きな200号（193.9cm×259.1cm）の絵画がこの「フェイラ」です。

郷土が生んだ日本洋画家の重鎮である吉井淳二氏（文化勲章受章者）が、庶民の生活をモチーフにしてブラジルの市場の風景を描いた作品です。

優れた芸術文化を提供する潤いの場、心の安らぎを与える憩いの場として今からちょうど20年前に開館した市民文化ホール。そこにある「フェイラ」は華やかさと落ちついた雰囲気を併せ持ち、訪れる多くの人たちの目を楽しませています。

（鹿児島市民文化ホール館長　岩崎　宣夫）

わが町上空 支所編

伊敷支所周辺

本市の北西部に位置する伊敷地区。大動脈国道3号と甲突川が地区の中央を貫きます。九州自動車道の鹿児島北インターも設けられていて、交通の要衝になっています。

写真中央、時計台がある建物が伊敷支所です。右側に隣接して伊敷小学校、国道をはさんで市内で8つある地域公民館の一つ伊敷公民館があります。

伊敷地区の人口は約5万7千人。住宅地は平野部から丘陵部に広がり、伊敷団地、千年団地、花野団地、近年では伊敷ニュータウンなどの大型団地が造成され、人口は増加傾向にあります。

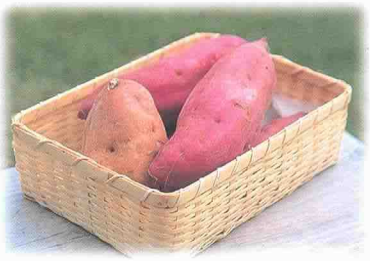
昭和25年本市に編入されてから53年。住宅地の周囲は、まだ緑豊かな農村風景が広がる、消費地に近い特性を生かした野菜や花などの生産地です。平成9年には犬迫町に都市農業センターも開設されました。

市民フォト・鹿児島

NO.94

編集・発行／鹿児島市広報課　鹿児島市山下町11番1号　電話 216・1133

印刷・レイアウト／渕上印刷株式会社



R100 この広報誌は、古紙配合率100%の再生紙を使用しています。